

研究概要

1. 研究名称 または課題名テーマ等

側弯症装具治療における患児と保護者への公認心理師による介入を試みて

2. 研究責任者(当院)

所属：聖隷佐倉市民病院

氏名：木村 弘美

3. 分担研究者

所属：聖隷佐倉市民病院

氏名：大崎 美奈子、小谷 俊明、佐久間 毅

4. 研究対象者

新規で側弯症装具治療を開始する患児と保護者。Cobb角 20 から 40 度の装具治療対象。

2025年1月から新規装具治療対象者で装具完成時、治療開始1ヶ月後に公認心理師(以下心理師)による心理外来を受けた77名(温度センサーあり)、25名(温度センサーなし)の計102名。

5. 研究の必要性

特発性側弯症は、10代のうちに小学校、中学校でのモアレ検診、運動器検診で見つかることが多い。Cobb角 20度を超えると装具治療が必要になる。基本入浴時間以外、20時間以上の装着が治療効果として必要とされる。受診時のCobb角により装具治療が必要とされたら、採型をおこない2W後には装具治療が開始される。装具が与える心理的ストレスは報告されており、装具装着時間に影響を及ぼす因子として、学校生活などの社会的環境、患児、親などを取り巻く家庭環境などいくつかあるが、要因は様々である。これまで、患児、家族からの相談に話を聴き思いに寄り添いながら装具治療の必要性を伝え、身体的な不快は減らせるようサポートし、装具技師とも連携してきた。装着時間が短くても、できていることを認め診療が途絶えてしまわないように関わってきた。しかし、診察室での医師との診療や待合室での看護師との短い時間での関わりでは、患児が側弯症や装具治療にどのような思いを抱き、理解しているかを知るには限界があり、心理的に専門性ある介入は困難であった。そこで、2025年1月から、側弯症装具治療を開始した患児と保護者に対し、装具完成時と治療開始1ヶ月後に整形医師の診察前に心理師による介入をおこない、患児、保護者へ装具治療の必要性への動機づけや理解の把握をおこない、自らが治療に臨めるよう支援できる体制を整えた。心理師が、外来で患児、保護者それぞれに医師からどのような説明を受け、装具についてどう思っているのか、学校生活や友人関係など保護者から見た患児の性格、患児自身が思うことを発言できるよう、コミュニケーションをとり装具治療の適応性を見極めながら関わっている。1ヶ月後では、実際に装具を開始しての装着時間や困っていることがないか聞き取りし、些細なことも質問できる場を設けることで、以前より患児自身が装具の必要性を理解し治療に臨んでいるように感じる。その後、看護師が関わる時にも、親からの心配事の質問は軽減し患児自身からの発言は、増えたと感じる。

6. 研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

患児と保護者への心理的サポートを心理師がおこなうことで、より専門的な立場からの判断ができ、患児の理解や受け入れ状況に応じたアドバイスが可能になる。

その情報を心理師、医師、看護師で共有することで患児、保護者への統一した関わりがはかれ、治療継続に貢献できると考える。

7. 対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1155

担当者氏名：木村 弘美

対応時間：平日 08:30~17:00 (平日)